～ 栗田とその周辺の ～

歴史めぐり

（栗田・中御所・若里編）

わたしたちが住む栗田と、その周りには、古くからこの地域に人々が生活していたことを示す遺跡、人々の信仰に関係する神社・寺や石造文化財、古くからの言い伝えがある場所などを多くみることができます。

それらの存在を知り、また存在する意義を理解することによって、わたしたちの郷土に対する愛着は、より深まることでしょう。

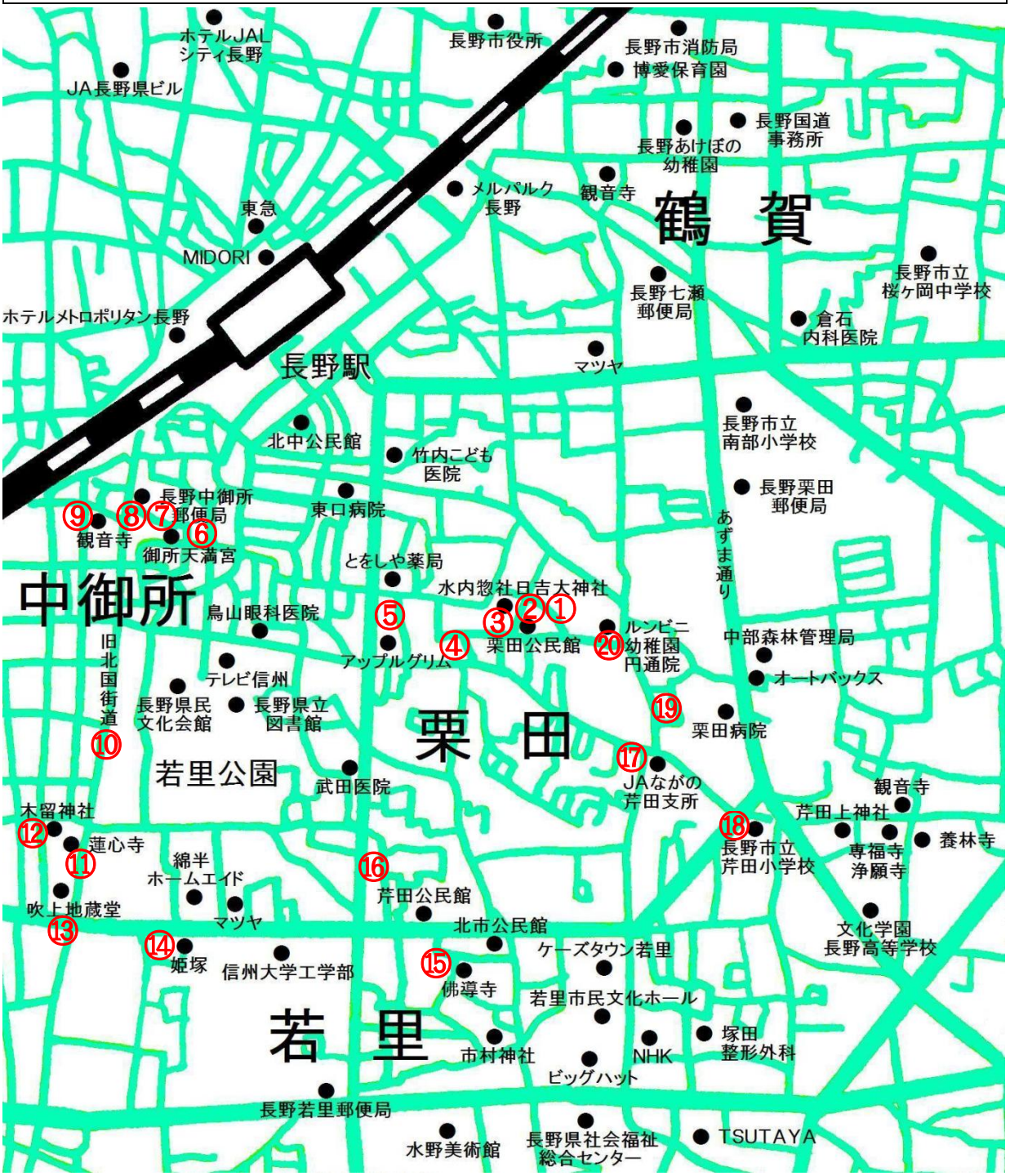
それでは、わたしたちの身近にある「歴史」を訪ねてみましょう。

目　次

		P
①	栗田城跡	1
②	日吉神社（水内惣社日吉大神社）	2
③	旧栗田村高札場	2
④	栗田吉原の石造文化財群（道祖神、庚申塔、二十三夜塔など）	3
⑤	「支那事変紀念」の碑	6
⑥	「悪源太義平」の墓	7
⑦	中御所守護館跡	8
⑧	御所天満宮・八幡社	8
⑨	観音寺	9
⑩	旧北国街道	10
⑪	蓮心寺	11
⑫	木留神社	11
⑬	吹上地蔵堂	12
⑭	姫　塚	13
⑮	仏導寺	14
⑯	「市村佐馬之助」の墓	15
⑰	旧芹田村役場跡	16
⑱	芹田小学校遺跡	16
⑲	水内俊昭の筆塚	17
⑳	円通院	18
	【参考文献】	19

栗田とその周辺・歴史めぐりマップ

① 栗田城跡　② 日吉神社　③ 旧栗田村高札場　④ 栗田吉原の石造文化財群
⑤「支那事変紀念」の碑　⑥「悪源太義平」の墓　⑦ 中御所守護館跡　⑧ 御所天満宮・八幡社
⑨ 観音寺　⑩ 旧北国街道　⑪ 蓮心寺　⑫ 木留神社　⑬ 吹上地蔵堂　⑭ 姫塚　⑮ 仏導寺
⑯「市村佐馬之助」の墓　⑰ 旧芹田村役場跡　⑱ 芹田小学校遺跡　⑲ 水内俊昭の筆塚　⑳ 円通院



< MEMO >

① 栗田城跡

現在、日吉神社がある場所は、かつて栗田城の本郭だった所です。

栗田城は、別名を堀之内城といい、長野市では最大規模の館跡の一つです。鎌倉時代から戦国時代にかけての約400年間、この地域の豪族・栗田氏の居城でした。

この城には、当時、二重の堀（敵を防ぐために城の回りにめぐらした人工の池）がありました。今、日吉公園になっている所がその跡です。（昭和48年に埋めたてられて、遊園地になりました。）

また、日吉神社の本殿が建っている高台も、実は城が築かれた当時に人力で土が盛られて造られたものです。（このようなものを「土塁」といいます。）

当時の城の範囲は、現在の日吉神社と日吉公園のエリアよりずっと広く、東はルンビニ幼稚園のあたり、西はファミリーレストラン「アップルグリム」のあたり、南は部屋田のあたり、そして北は栗田新道が通じているあたりまで含まれていました。

栗田氏は、甲斐（現在の山梨県）の武田信玄と越後（現在の新潟県）の上杉謙信が争った「川中島の戦い」（1500年代後半）の時には武田方につき、天文24年（1555年）には栗田鶴寿らが旭山城に入って戦い、上杉勢を相手に約百日も守り通しましたが、その戦いの後、栗田氏は甲斐に移っていき（栗田鶴寿は後に遠州の高天神城で戦死）、そのまま子孫も戻ることなく、栗田城もやがて廃されてしまいました。

平成２年（1990年）、栗田城跡の一部に「グランドハイツ東公園」マンションが建設されることになり、それに先立つ発掘調査が行われた結果、13世紀から15世紀前半にかけて造られたと思われる中国産の磁器、瀬戸・美濃産の陶器、土器、古銭（永楽通宝など）が多数発掘されました。ことに古瀬戸の天目茶碗は見事なものです。（平成22年11月に日吉神社社務所で特別展示されました。）

栗田城跡で出土した古瀬戸天目茶碗（右）と風炉の破片（左）（平成22年11月展示）

② 日吉神社（水内惣社日吉大神社）

かつての栗田城の本郭の土塁上に建つ神社が、日吉神社（水内惣社日吉大神社）です。

この地には、もともと栗田城があった頃から、この土地の産土神（この地域の昔からの守り神）である「栗田大元神社」がまつられていましたが、明治41年（1908年）に、山王にあった「水内惣社日吉大神社」と、部屋田にあった「日の御子社」などが合祀（合わせておまつりすること）されました。

祭神は「大山咋命」(志賀県大津市の日吉大社の祭神。「大山に杭を打つ神様」、つまり大きな山を持っている神様という意味。)と「罔象女命」(女の神様で、水や井戸の守り神。)です。

春祭りは５月３日で、秋祭りは９月23日です。

栗田城本郭跡の土塁の上に建つ日吉神社

③ 旧栗田村高札場

日吉神社の境内の片隅に、旧栗田村の高札場が移築・保存されています。

高札場とは、江戸時代に、当時の法律（「法度」という。）や、きまり（「掟書」という。）などを記した板札を、その地域の人々に広く知らせるため、高く掲げられるようにした場所のことです。

かつてはルンビニ幼稚園の入口近くに建てられていました。

旧栗田村の高札場の遺構（日吉神社境内）

④　栗田吉原の石造文化財群（道祖神、庚申塔、二十三夜塔など）

日吉神社の南西、栗田吉原の辻に、石で造られた多くの碑や祠（石造文化財）がある一角があります。これらは、それぞれ昔からの信仰や習慣と深く関係しているもので、大部分は江戸時代末期の天保年間（19世紀前半）に建てられたものです。

このような石造文化財は、ここに限らず、各所に存在します。また、地域ごとに、ちがった特徴もみられ、興味をもって調べてみると、なかなか面白いものです。

なお、これらの石造物は、押したりさわったりすると倒れる危険があるので、見るときには、十分注意しましょう。

栗田吉原の石造文化財群（左から、庚申塔、道祖神、二十三夜塔）

○　道祖神

道祖神は、その名のとおり、道の神様で、旅行や交通安全にご利益があるといわれているほか、地域自体の守り神とされたり、男女の良縁、子孫繁栄の神様とされたりするなど、いろいろな性格をもっている神様で、主に村の境や道の辻にまつられます。

安曇野地方などでは、男女が並び立つ姿が彫られた石像であることが多いのですが、栗田や、その周りの地域では、「道祖神」の文字を彫った石碑がほとんどです。

長野県は全国でも道祖神が多い県として知られています。

なお、毎年、１月15日の「小正月」前後に行われる「どんど焼き」の行事とも関係があるようです。

○　庚申塔

庚申塔は、中国の宗教を起源とする「庚申信仰」により建てられた石碑です。

この信仰によれば、人間の体内にいる「三尸」という虫が、庚申の日の夜に体内から抜けだし、天帝にその人の悪事を報告するため、早死にしてしまうとされています。

そこで、それを防ぐため、庚申の日の夜には徹夜して宴会などをする習わしがあり、これを「庚申講」とか「庚申待ち」といいます。

栗田の近辺では「庚申塔」の文字を彫っただけの石碑であることが多いですが、若里には「青面金剛神」（悪い病気を防ぐ神）と、その使いの三猿（「見ざる」「言わざる」「聞かざる」といったりします。）などを彫った石像もみられます。

なお、庚申の日は、昔の暦で使われていた「十干（甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸）・十二支（子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥）」の中の、「庚」と「申」の組み合わせに当たる日で、60日ごとに回ってきます。

○　二十三夜塔

江戸時代の半ば過ぎ（18世紀ころ）から、十五夜、十九夜、二十三夜など、決まった月齢の夜に人々が集まって飲食をしたり、月を信仰して拝む「講」が盛んになりました。この「講」を「月待」といい、中でも二十三夜講がもっとも広まりました。

この講では、月を「勢至菩薩」（智恵の光で一切を照らし、人々にこの上ない力を得させるという菩薩。「菩薩」とは悟りを求める人という意味。）の化身として拝み、おまつりしました。栗田の近辺の講も、ほとんどが二十三夜講だったようです。

二十三夜塔は、この二十三夜講の人々により、供養の記念に建てられた石碑です。

○　奉納経日本廻国神社仏閣供養塔

この石碑は、次の「奉納経大乗妙典供養塔」より３年ほど後に、同じ行者さんによって建てられたものです。

日本各地の有名な神社やお寺に参拝して、修行した記念に建てられたものでしょう。

当時は栗田に限らず、こうした純粋で篤い信仰心をもつ人がたくさんいたのです。

「奉納経日本廻国神社仏閣供養塔」と刻まれた碑面

○　奉納経大乗妙典供養塔

江戸時代の半ば過ぎ（18世紀ころ）には、仏教などの教えが、人々の間にかなり広まったことにより、信仰に基づく様々な石碑が造立されました。

ここ栗田吉原にある「奉納経大乗妙典供養塔」も、そのような石碑の一つです。

「納経」とは、供養などのために経文を寺社に納めることをいい、この碑は、「大乗妙典」(「妙法蓮華経」＝「法華経」) というお経を、納経供養したことを記念して建てられたものでしょう。

この供養塔で見逃せないのは、裏面に彫られた文字です。そこには、この石碑を建立した行者さんの名前などとともに、「戸隠山神領栗田村」と刻まれています。

江戸時代の栗田は、時期により、江戸幕府の領地となったり、越後高田城主・松平氏の領地になったりしましたが、安永年間（1770年代前半）頃から明治維新に至るまでの間は、幕府領と戸隠山神領（戸隠神社の領地）の分け郷となっていました。

この供養塔が建てられたのは天保11年（1840年）で、まさにその時期にあたります。そしてまた、わざわざ「戸隠山神領」と記されていることからして当時「大乗妙典」が納経されたのは、おそらくは戸隠神社だったのではないかと想像されます。

石碑に刻まれた文字は、このように、当時の様子を知る手がかりを示してくれることもあるのです。

「戸隠山神領栗田村」と刻まれている「奉納経大乗妙典供養塔」の裏面

○　石祠

神様や仏様をおまつりした小さいお堂のことを「祠」といいます。「石祠」とは、それが石で造られた特に小さいもので、全国どこでも、非常に多くみられ、まつられている神様なども様々です。

ここ栗田吉原にある石祠は、建てられた年も、まつられている神様もよくわかりませんが、近年まで「蚕神」（養蚕の守り神様）の祭事が行われていたそうです。

なお、この石祠のように、屋根が前に向けて流れるようになだらかに伸びている造りの建築を「流造」といいます。

○　石灯籠

この場所にはもう一つ、石造の灯籠がみられます。これは、夜に火で明かりをともすために造られたものです。日や三日月の形などをした窓が開けられている、かわいらしいものですが、こんなに小さい石灯籠でも、今のように街灯もない昔の時代にあっては、この地域の人々に大変大切にされてきたものと思われます。

石灯籠（左手前）と石祠（右奥）

⑤　「支那事変紀念」の碑

日吉神社の西、ファミリーレストラン「アップルグリム」近くの倉庫の脇に、「紀念 支那事変」と刻まれた長細い石塔が、ひっそりと建っています。

「支那事変紀念」の碑

昭和12年（1937年）以降、日本は中国と戦争状態に突入しました。（当時、この戦争状態を「支那事変」又は「日華事変」と呼称しました。現在は「日中戦争」とも呼ばれます。）日本政府は当初、この戦争状態を早期に収拾しようと考えていましたが（「不拡大」方針）、その意に反して戦火は拡大の一途をたどり、やがて太平洋戦争へとつながっていきました。

当時の日本は、この一連の戦いにより、日本を含むアジア地域が、それまでの欧米による植民地的支配から独立した「大東亜共栄圏」を打ち立てるのだという理想を高くかかげ、官（行政）と多くの国民とが一致協力して様々な活動に取り組みました。

この「支那事変紀念」の碑は、そのような機運の高まりの中、昭和14年（1939年）に、栗田の吉原組により寄付金を募って建てられたものです。（この頃、日本では中国のことを、英語のChinaに漢字をあてて「支那」と呼んでいました。「紀念」は「記念」とほぼ同じ意味です。）

現在からみれば、暗い戦争の時代の遺物ではありますが、反面、当時の世相を今に伝えてくれる、貴重な「時代の証言物」の一つといえます。

⑥　「悪源太義平」の墓

源　義平は、平安時代末期（12世紀後半）の武将で、鎌倉幕府をひらいた　源　頼朝の親でもある　源　義朝の長男です。

久寿２年（1155年）、　源　義朝と叔父の　源　義賢（信州の英傑・朝日将軍木曾義仲の父）との対立により起こった「大蔵合戦」で、義平は義賢を討ちとり、これ以後「悪源太」と呼ばれるようになりました。（ただし、当時の「悪」とは「悪い」という意味ではなく、「強い」という意味が大きかったといいます。）

その後、平治１年（1159年）の「平治の乱」で　平　清盛の軍勢と京都で戦って破れ、落ちのびる途中で父・義朝が討たれたことを知り、仇を討つため京都に戻りましたが、翌年の永暦元年（1160年）に捕えられ、六条河原で処刑されてしまいました。

この悪源太義平の墓と伝えられるものが、なぜか栗田にあります。『長野県町村誌』によれば、義平の愛妾が遺骨を持ってきて葬ったという伝承があるとのことですが、確証はありません。ただ、そのあたりの地名は昔から「源太窪」と呼ばれてきたことだけは確かです。また、建久８年（1197年）に弟である　源　頼朝が善光寺へ参詣に訪れていますので、あるいはそのことと何か関係があるのかもしれません。

なお、この石塔は、かつては長野駅の近く（今の「メルパルク長野」あたり）にあったそうですが、開発が進んだことにより、現在の場所に移されました。『長野県町村誌』の図によれば、元々はもっと丈が高かったようですが、今では上部の石が失われてしまっているようなのが残念です。

「悪源太義平」の墓といわれている石塔（右）

⑦　中御所守護館跡

中御所地区には、学問の神様として有名な「御所天満宮」がありますが、このあたりは、室町時代初期（14世紀中頃）から、当時の信濃国（現在の長野県）の守護（鎌倉時代から室町時代にかけて、幕府が国ごとに置いた武家の役職で、現在の県知事のようなもの。）小笠原氏の館があったところです。

小笠原氏の中でも、小笠原政康は信濃を統一し権勢を誇りましたが、彼の死後、子の宗康と従兄弟の持長との間で家督争いになり、文安３年（1446年）に「漆田の戦い」が起こりました。この戦いで、持長は守護館を攻め、宗康を滅ぼしました。

その後、守護館は廃止され、持長も府中（現在の松本市）に移っていきました。

なお、「中御所」の地名の由来は、建久８年（1197年）に源頼朝が善光寺へ参詣に訪れた際、漆田氏が館を造って宿としたことによるといわれており、その館の跡だという言い伝えもあります。

菅原道真像
（御所天満宮）

御所天満宮
（八幡社）

⑧　御所天満宮・八幡社

中御所守護館跡に建つ「御所天満宮」は、菅原道真をまつり、長野市内では朝日山観音とならんで学問の神様として有名です。

この神社は、元々は八幡社（武運の神とされる八幡神を祭神とする神社で、日本各地に多くあり、総本宮は宇佐神宮。）でしたが、昭和54年に東京都江東区亀戸にある亀戸天神社を傍にまつり、今ではすっかり「天満宮」で定着してしまいました。

菅原道真は、平安時代前期（９世紀後半ころ）の学者で、右大臣という重要な役職に任じられたこともある優れた人物でした。その学識にあやかろうと、１・２月の受験シーズンには、合格祈願に訪れる受験生で結構なにぎわいを見せています。

最近は神様や仏様を信じない人も多いようですが、それでも今も昔も、先に不安をかかえる人々の「神頼み」の気持ちはあまり変わらないようです。

なお、今の社殿は、火災後に再建された新しいものです。

⑨ 観音寺

栗田に隣接する中御所地区にある、浄土宗の寺です。（浄土宗は「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えると、阿弥陀如来の慈悲により、誰でも西方極楽浄土に迎えられると説く仏教の一派。「如来」とは悟りを開いた覚者のことで、阿弥陀如来は西方極楽浄土の教主。）

ご本尊は馬頭観音菩薩（観音菩薩の変化の一つで、あらゆる悩みをたちきる功徳があるとされ、馬の神様でもあります。）と聖観音菩薩（あらゆる変化観音の根本で、普通「観音」という場合はこれをさします。）です。

源　頼朝創建ともいわれる観音寺

この寺は、建久年間（1190年～1199年）に漆田氏が開基創建したとされていますが、建久８年（1197年）に、鎌倉幕府をひらいた　源　頼朝が善光寺へ参詣に訪れて、この地に泊まった際、「お告げ」があったことにより、頼朝が創建したとの言い伝えもあります。

（『長野市誌』によれば、本尊である聖観音は漆田氏の守仏で、馬頭観音は　源　頼朝の守仏「髻観音」とのことですが、現地の石柱にはこれと異なる記述もあります。）

観音の縁日である８月９日は「四万八千日」といい、この日に参詣すると4万8,000日も参詣した功徳があるとされ、今も大勢の参詣者でにぎわいます。

なお、中御所地区では、室町時代後期（16世紀）以降、信濃守護の小笠原氏が去った後、漆田氏がこの地を支配しましたが、やがて栗田氏と争って敗れ、衰亡しました。

観音寺には、漆田出羽守秀豊の墓といわれる宝篋印塔があります。（宝篋印塔は、内部に「宝篋印陀羅尼経」という経文を納めた塔を起源とする石塔の形式の一つで、墓標にもよく用いられました。）

⑩　旧北国街道

御所天満宮の西に南北に通っている道が、旧北国街道です。

この街道は、江戸時代以前には、越後の北陸街道（直江津）と、中山道（信濃追分）とを連結する重要な交通路でした。

中御所に通じている部分は、善光寺宿と丹波島宿との間の区間にあたりますが、この道に沿って信濃守護の館跡や源頼朝の言い伝え、さらには後で述べる鎌倉時代の姫塚などが残されていることから、このあたりは古くから善光寺参詣の道として開けていたことがわかります。

旧北国街道
（蓮心寺前）

荒木の旧街道沿いには、寛延２年（1749年）に造立された馬頭観音（通称「赤地蔵」）がまつられています。当時、馬が人や荷物の重要な運搬手段として、街道をひんぱんに行き交っていたことを、今に知らせてくれる貴重な名残といえます。

また、荒木からさらにこの道を南に進むと、やがて犀川にかかる丹波島橋に達しますが、ここには江戸時代にはまだ橋がかかっておらず、「市村（丹波島）の渡し」という、対岸に綱をはった渡し場になっていました。

ここに初めて木橋がかかったのは明治23年です。

荒木の馬頭観音（赤地蔵）

⑪ 蓮心寺

浄土宗の寺で、本尊は阿弥陀如来です。

建久６年（1195年）２月、浄土宗の開祖・法然上人が善光寺に参詣した時、蓮心というお坊さんの願いにより、この寺を建てて「蓮心寺」と名づけたといわれています。

この寺は延享２年（1745年）、安永５年（1776年）と２度も火災にあっており、現在の本堂は文化10年（1813年）に再建されたものです。

明治13年（1880年）、「成田山」から不動尊を勧請（神仏の分身・分霊を迎えておまつりすること。）しました。（「成田山」は千葉県成田市にある「成田山新勝寺」の通称で、不動尊は成田山の本尊仏。諸悪を打ち破る仏様であることから、家内安全、交通安全などにご利益があるとされています。）

なお、この寺の境内にある地蔵菩薩（延命地蔵）の立像は延宝８年（1680年）造立の古いもので、一見の価値があります。

ひなびた雰囲気の蓮心寺

⑫ 木留神社

中御所地区の南にある荒木地区（旧荒木村）の産土神で、正治年間（1199年～1201年）以前に勧請されたという古い歴史をもつ神社です。祭神は健御名方命（諏訪大社の祭神で、古来、軍神として信仰されてきたほか、農耕、狩猟などの神様ともされます。）です。

かつては犀川の岸近くにあって、川を流れてくる木がここに留まることが多かったので、「木留明神」と呼ばれたそうです。（明治11年に木留神社と名を改めました。）

また、善光寺の建物に使うための材木を、上流の仁科から犀川に流して、この地で陸揚げしようとした際、洪水で材木が流失しそうになりましたが、すんでのところで「木留明神」の神様が翁に化身して現れ、木を留めてくれたという言い伝えも残っています。

そのような由緒ある神社ですが、延享２年（1745年）に火災にあい、古文書や宝物などを失ってしまったのが惜しまれます。

木留神社（かつては犀川の岸近くにあったそうです。）

⑬ 吹上地蔵堂

蓮心寺のすぐ南に「吹上地蔵堂」という、延命地蔵尊をまつるお堂があります。

このお堂は、境内にある「本堂再建供養塔」によれば、文政元年（1818年）に再建されたものだそうで、現地の立札によれば、安産、子育安穏、延命長寿にご利益があり、例大祭は毎年４月23日とのことです。

おまつりされている延命地蔵尊は、鮮やかに着色された見事なものです。

「吹上」とは、このあたりの地名で、近隣には木留神社や蓮心寺もあることから、かつては北国街道を行き交う旅人が一息入れる場所となっていたことでしょう。

境内には、「皇紀二千六百年記念」の石碑（皇紀とは、日本書紀で神武天皇が即位したとされる年を元年として数えた年数で、西暦とは別です。戦前の昭和15年＝西暦1940年が、ちょうど皇紀二千六百年の年にあたるとされ、当時は盛大な記念行事が行われたそうです。）や、「奉巡礼西国坂東秩父当国四国供養塔」などがみられます。

吹上地蔵堂の延命地蔵尊

⑭ 姫　塚

旧北国街道から分かれ、信州大学工学部に向けて東に進むと、同学部のすぐ北西に、墓地の中に欅の巨木が立つ塚があります。これが「姫塚」です。

この塚は、源氏と平氏が争った「源平の争乱」（12世紀後半）の際、源氏の側の武士であった熊谷直実の娘「玉鶴姫」を葬った地と伝えられています。

熊谷直実は当時、武勇をもって知られた武士の一人でしたが、「一の谷の戦い」（1184年）で、平敦盛を討ったのをきっかけに、世の無常を感じ、出家して浄土宗をおこした法然の弟子となり、蓮生と号して善光寺で修行しました。

その後、文治４年（1188年）の夏、直実の娘の玉鶴姫は、父に会いたい一心で、遠く武蔵国の熊谷（現在の埼玉県熊谷市）から、侍女とともにはるばる善光寺をめざして旅をしてきましたが、市村（丹波島）の渡しを渡ったところで病に倒れ、７月５日に亡くなってしまいました。直実は善光寺で修行中、市村の方に紫雲がたなびくのを見て、同地に訪れ、そこで病に倒れている妙蓮尼（出家した玉鶴姫）と出会い、それが自分の娘であることを知りましたが、直実は自分の修行心がゆらぐのを恐れ、結局、最後まで自分が親であると名のることなく、死に別れてしまったといいます。

直実は姫を不憫に思い、現在の姫塚の地に葬るとともに、次に述べる「仏導寺」を建て、わが子である姫の菩提を弔ったそうです。

現在、姫塚には、欅の巨木の根元に大きい五輪塔と、玉鶴姫の伝説が記された石碑が並んでひっそりと建っています。

熊谷直実の娘「玉鶴姫」が葬られた「姫塚」

⑮ 仏導寺

浄土宗の寺で、本尊は阿弥陀如来です。

「姫塚」の項でも触れたとおり、この寺は文治４年（1188年）、熊谷直実が娘の玉鶴姫を供養するため創建したとされ、玉鶴姫の像が安置されています。

また、この寺の本尊の阿弥陀如来像は、他所ではあまり見られない立像で、手には綱をお持ちになられているという珍しいものです。これは、玉鶴姫が市村（丹波島）の渡しで犀川を渡るのに難儀しているところを、綱を張ってお助けになられようとしている姿を表現したとのことです。

仏導寺本尊「綱引き阿弥陀如来像」

出家姿の玉鶴姫の像
（戒名：「仏導院殿一乗妙蓮大禅定尼」）

この寺の境内には、石造文化財も多く、庚申塔、地蔵菩薩坐像、念仏塔（「南無阿弥陀仏」という浄土宗の念仏を文字で記した石塔）、奉納経神社仏閣供養塔（栗田吉原にある「奉納経日本廻国神社仏閣供養塔」と同様のもの）などがみられますが、中でも注目すべきは、如意輪観音坐像でしょう。これは、栗田とその周辺地域では、ここにしかみられない珍しいものです。（如意輪観音は、変化観音の一つで、片膝を立て首をかしげた独特な姿をしており、人々の心の迷いを解消し健康や財産を与えてくれるという菩薩です。）

また、ここでは「萬霊等」にも注目してみましょう。この石碑は普通、寺の境内にあるもので、世の中のありとあらゆる霊魂を等しく供養するという意味で建てられたものです。（そのため、最後の文字が「塔」でなく、あえて「等」の字があててあるものが多いのが特徴です。）なお、他所では「三界萬霊等（塔）」と記しているものもあります。（「三界」とは、「欲」「色」「無色」の三種の世界、すなわち「全世界」を意味します。）

⑯ 「市村佐馬之助」の墓

栗田に隣接する若里北市には、市村佐馬之助という武士の墓があります。墓の刻銘によれば、この人は応永７年（1400年）に起きた「大塔合戦」で戦死しました。

大塔合戦とは、当時の信濃国守護・小笠原長秀の支配に対し、地元豪族たちが反抗して起こした「大文字一揆」により、善光寺平南部で起こった合戦です。

長秀が信濃国守護に着任した時の態度は、大変、横柄なものだったそうで、地元の豪族たちの強い反発を招きました。さらに、長秀が川中島で年貢の徴収を開始したことが、両者の対立を決定的にしました。(川中島は本来、小笠原氏の領地だったのですが、室町幕府をひらいた足利尊氏と弟の足利直義とが対立して争った「観応の擾乱」や、それに続き、日本の皇室が南北２朝に分かれて争った「南北朝時代」の混乱の中で、長秀が着任するまでに小笠原氏の領地を乗っ取ってしまっていた地元豪族が多かったことも、対立の一因となったようです。)

「大文字一揆」に加わった地元豪族は、村上、仁科、海野、根津、高梨、井上など、当時の信濃国の有力豪族の大半に及び、栗田を本拠とする栗田氏も加わりました。

市村佐馬之助はこの時、守護の小笠原氏の側に属しており、優勢な一揆軍に対して悲壮な決意をもって勇戦敢闘したものと思われます。

長秀は、篠ノ井の横田城にこもって応戦しましたが、防ぎ切れず、塩崎城に後退を試みましたが、脱出に成功したのは長秀以下わずか150騎ほどで、残りの300騎余りは逃げ遅れ、途中の大塔の古城にこもって悪戦苦闘の末、全滅してしまいました。

市村佐馬之助が戦死したのも、おそらくこの時と思われます。

長秀は命からがら京都に逃げ帰ったものの、間もなく信濃守護職を免ぜられ、信濃国はそれから当分の間、幕府の直轄領となっていました。

なお、現在の若里北市・南市のあたりは、かつては「市村」と呼ばれていました。

市村佐馬之助は、その姓から、市村出身の有力武士だったと思われます。

市村佐馬之助の墓

⑰　旧芹田村役場跡

芹田小学校から西に約200メートルほどの「ＪＡながの芹田支所」前に、「芹田村役場」と彫られた大きい標柱があります。

ここが、旧芹田村役場の跡地です。

芹田村は、明治22年（1889年）４月１日、それまでの栗田・稲葉・若里・中御所・川合新田の５か村と、鶴賀町の中の七瀬区と居町が合併して誕生した村で、後に大正12年（1923年）７月１日に長野市に合併するまでの、約34年間、存続しました。

旧芹田村役場の標柱

⑱　芹田小学校遺跡

旧芹田村役場跡の東には、長野市立芹田小学校がありますが、ここは実は、少なくとも平安時代以前からの遺跡なのです。（皆さん、知ってましたか？）

昭和61年（1986年）、校舎の増改築事業に先立ち、長野市遺跡調査会が緊急発掘調査を行ったところ、竪穴式住居跡などで構成される集落跡の一部と、甕、鉢、高坏（高台付きの食器）などの土器が発見されました。

土器は「須恵器」（「ろくろ」＝円形の台を回転させながら、その上にのせた粘土を成形していく道具を用いて成形した、窯焼きの土器。古墳時代～平安時代に用いられました。）の特徴を有しており、ろくろによる成形の痕跡が顕著であることから、平安時代後半期（９～10世紀頃）のものと推定されています。

また住居跡は、普通の竪穴式住居が一辺４メートル程度なのに、ここのは一辺６～８メートルもあり、面積にして普通の４倍の規模の大形住居であることが注目されます。

芹田小学校では以前にも、グラウンド拡張時に「箱清水式土器」（千曲川流域を中心とした広い地域において、弥生時代後期に製作された土器。長野市箱清水で出土したことから、このように呼ばれています。）が出土したことがあり、さらに周辺地域においても、日詰、九反、荒木や、文化学園長野高等学校敷地などから、平安時代の須恵器や土師器（手で成形した、野焼きの土器で、同時期に並行して製作された「須恵器」より品質・形がやや劣るものです。）が出土しています。

栗田近辺ではこの他にも、**東番場遺跡**（日吉神社の西方約120メートルほどの地点にあり、古墳時代前期～奈良時代の集落跡。昭和62年９月に発掘調査、住居跡や様々な土器が出土。）、**芹田東沖遺跡**（現在の「ビッグハット」のすぐ北のあたり。平成４～５年に発掘調査、「市寸」と墨で記された奈良時代の須恵器や平安時代の遺物が出土。「寸」の文字には昔は「村」と同じ意味があったそうなので、「市寸」＝「市村」、つまり今の若里を意味しているようです。）、**御所遺跡**（栗田で長野駅周辺第二土地区画整理事業の開始に先立ち、平成６年に発掘調査。古墳時代～中世の遺物を発見。）など、多くの遺跡がこれまで知られており、古くからこの地域がひらけていたことがわかります。

もしかしたら、皆さんの家の地下にも、遺跡が眠っているかもしれませんね!?

⑲　水内俊昭の筆塚

旧芹田村役場跡から北に少し進んだところに、この地域の寺子屋師匠として人々の教育に尽力した水内（本姓倉石）俊昭の「筆塚」があります。

筆塚とは、使い古した筆の供養のために、筆を地に埋めて築いた塚です。

水内俊昭は、弘化４年（1847年）の「善光寺大地震」で亡くなった倉石俊明の妹婿に入り、寺子屋を継いで地域の人々に読み・書きを教えました。また、当時は普通、武士にしか許されなかった佩刀（刀を帯びること）を特別に許され、さらに水内の姓を名のることも許された、この地域の名士の一人でした。

（善光寺大地震の際、栗田は比較的被害が少なくて、潰れた家も出ず、また地震の後に犀川を一時せきとめていた土砂が決壊したことによる大水害の被害も栗田までは及ばず、村の中では一人も死者は出なかったのですが、たまたま地震発生時に善光寺町に出かけていた村民の中から死者５名を出してしまいました。水内俊昭が後を継いだ倉石俊明は、残念なことにその５名の中の一人でした。）

なお、筆塚のすぐ隣には、形のよい石に達筆な文字を刻んだ道祖神があります。

水内俊昭の筆塚（左の碑）

⑳ 円通院

善光寺近くにある西方寺の末寺（本寺＝本山に付属する寺）で、宗派は浄土宗、本尊は如意輪観音です。「ルンビニ幼稚園」に隣接して建っており、さながら地域の子どもたちの成長を見守ってくれているかのようです。

この寺のある場所は、栗田城の東の虎口（城の入口）付近にあたっていたようであり、栗田城主であった栗田氏の守仏をまつった堂の跡ともいわれています。

明和年間（18世紀半ば過ぎ）には、かつて栗田氏の重臣であったという三戸部氏の持分になっていました。境内には明和５年（1768年）に建てられた「三界萬霊塔」があり、この碑にも施主として三戸部氏の名が刻みつけられています。

境内にはその他、庚申塔や地蔵菩薩などの石造文化財がみられます。

なお、つい最近まで、文化２年（1805年）の改築による本堂が残っていましたが、平成に入ってから新しく建て直され、当時のひなびた雰囲気は失われてしまいました。

昭和50年代前半頃の円通院本堂（今は建て直された）

円通院の地蔵菩薩石像

【 参 考 文 献 】

『長野縣町村誌 第一巻 北信篇』(長野県編／1936 年／復刊 1973 年･名著出版)

『善光寺平』(小林計一郎著／角川書店刊 1967 年)

『長野市の石造文化財(第 1 集)』(長野市教育委員会編／1978 年)

『カシヨニュース』第 34 号「歴史の道 北国街道をゆく」

(カシヨ印刷株式会社発行 1980 年 8 月 20 日)

『長野県の中世城館跡 分布調査報告書』(長野県教育委員会編／1983 年)

『図解 文化財の見方 歴史散歩の手引』(人見春雄ほか編／山川出版社刊 1984 年)

『信州の神事』(長野県神社庁監修／銀河書房刊 1990 年)

『定本 北信濃の城』(小林計一郎･湯本軍一監修／郷土出版社刊 1996 年)

『信州の城と古戦場 24 版』(南原公平著／令文社刊 1997 年)

『長野市誌』(長野市誌編さん委員会編／長野市刊)

- 第 2 巻 歴史編 原始･古代･中世 (1997 年)
- 第 8 巻 旧市町村史編 旧上水内郡 旧上高井郡 (1997 年)
- 第 10 巻 民俗編 (1998 年)
- 第 12 巻 資料編 原始･古代･中世 (2003 年)
- 第 16 巻 歴史編 年表 (2005 年)

『日本の神様 読み解き事典』(川口謙二編著／柏書房刊 1999 年)

『信州の民話伝説集成 北信編』(高橋忠治編著／一草舎刊 2005 年)

『新版 信州ふるさと変遷史 県下 81 市町村のルーツと現在』

(長野県図書館協会編／一草舎刊 2006 年)

『歴史探訪に便利な日本史小典 6 訂版』(日笠山正治編／日正社刊 2008 年)

『「歴史的魅力ある重要物と思われる物」の調査報告書』

(文化財的物件等調査 その 1／栗田まちづくり協議会 歴史文化研究部会 2012 年)

〈 本冊子作成のねらい 〉

栗田のほぼ中心に位置する日吉神社を基点として、栗田及びその周辺地域（今回は西と南）の主要な「歴史スポット」を、のんびり歩いて学びながら、また日吉神社に戻ってこれる半日程度の周回コースを想定しました。

最近、子どもたちが外に出て遊ぶ機会が減っているようですが、たまには外に出て歩いてみることで、自分たちの身近にある何気ない物や情景にも、実は思いがけない深い歴史や意味があるのだということへの「気付き」を促し、ひいては子どもたちが自分たちの郷土を見直すきっかけとなってくれればと願うものです。(H･Y)

Copyright ©2012. 2.14～ Hiroki Yamazaki. All Rights Reserved.